

指導資料



鹿児島県総合教育センター

平成31年4月発行

国語 第145号

対象

中学校 義務教育学校

校種

特別支援学校

「学びの深まり」を実感する中学校国語科の授業改善 ―「言葉による見方・考え方」を働かせる言語活動を通して―

国語科の学習指導を通して「学びの深まり」の鍵となるのが「言葉による見方・考え方」である。この「言葉による見方・考え方」を働かせながら、言語活動を通して課題を解決し、「学びの深まり」を実感する授業改善の方向性を示すとともに、具体的な実践例を紹介する。

1 はじめに

グローバル化や多文化共生など加速度的に変化の激しい社会を生きるための資質・能力を生徒が身に付けるためには、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められている。そこで、中学校国語科で育成を目指す資質・能力とこれからの授業改善のあるべき方向性について考えてみたい。

(1) 中学校国語科の目標

平成29年3月に公示された新学習指導要領において、育成を目指す資質・能力の三つの柱である「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」に基づいて、国語科の目標は次のとおり示されている。

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。
- (2) 社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。
- (3) 言葉がもつ価値を認識するとともに、言語感覚を豊かにし、我が国の言語文化に関わり、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。(※ 下線は筆者による)

このように、中学校の国語科の目標の柱書きには、小学校及び高等学校の目標にも共通して「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して」という文言が明記された。国語科は、言語活動を通して指導事項を指導し、資質・能力（国語で正確に理解し、適切に表現する資質・能力）の育成を図る教科である。このことは、これまで同様変わることはないが、「言葉による見方・考え方」については、国語科の学習指導要領の中で初めて用いられることになった。

(2) 「言葉による見方・考え方」の捉え方

『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編』の中で、「主体的・対話的で深い学びの実現を目指して授業改善を進めるに当たり、特に『深い学び』の視点に関して、各教科等の学びの深まりの鍵となるのが『見方・考え方』である。」と示しており、「言葉による見方・考え方」とは、国語科の「学びの深まり」の鍵となる視点や考え方と捉えることができる。同解説の国語編には「言葉による見方・考え方を働かせること」を次のように定義している。

生徒が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉えたり問い直したりしながら、言葉への自覚を高めること

この「言葉による見方・考え方」を働かせながら生徒が言語活動を通して、国語科の資質・能力を育成する必要がある。

2 「深い学び＝学びの深まり」を支える「言葉による見方・考え方」

まず、授業改善を進めるに当たって、国語科において目指すべき「深い学び」とは、「思考の到達点」ではなく、「生徒の学びが深まる思考の過程（以下「学びの深まり」という。）」であると捉えておく必要がある。この「深い学び＝学びの深まり」の鍵となるのが、言語活動を通して、働かせることになる「言葉による見方・考え方」である。

次に、生徒が言語活動に取り組む際に、国語科固有の「言葉による見方・考え方」を働かせることができるような単元構想や授業設計を、指導者がどれだけ意識して行ってきたかを今一度振り返る必要がある。

最後に、国語科固有の「言葉による見方・考え方」を明確にする必要がある。これを「言葉や表現の着眼点（見方）」とその見方に基づいて「働かせたい思考操作（考え方）」と捉え、例えば、文学的文章等を読む学習で働かせる「言葉による見方・考え方」を、次の表1のように考えてみる。

表1 「言葉による見方・考え方」の例

文学的文章で働かせたい「言葉による見方・考え方」	
見方（着眼点）	考え方（思考操作）
視点／人物設定・場面構成	想像
描写	比較・分析・対照
人物描写・行動描写	具体（抽象）化
心情描写・情景描写	関係（関連）付け
表現や技法	吟味・意味付け

このようにして「言葉による見方・考え方」を働かせて文学的文章を読むと、例えば、描写表現（行動描写や心情描写等）に着眼して人物像を比較・分析したり、関係（関連）付けたりできるようになる。そして、指導のねらいに応じて、表現や言葉の着眼点（見方）を明確にし、その着眼点

（見方）を働かせることができる単元を構想したり、授業設計を工夫したりすることにより、「学びの深まり」を実感できる国語科の授業改善ができるようになる。

3 「言葉による見方・考え方」を働かせる言語活動と思考を促す言葉（語彙）の活用

生徒が「言葉による見方・考え方」を働かせ、言語活動を通して国語科の資質・能力を身に付けるためには、生徒が思考を促す言葉や思考を展開する語彙を意図的に使用する学習場面の設定が必要である。例えば、自他の考えを交流する場面では、以下に挙げる言葉や語彙を使って助言や質問による交流を行うことが有効である。

○考えの根拠や理由を明確にさせる言葉

「なぜ～のように考えたの？」
「どうして～のように考えたの？」

○考えの要約や抽象化を促す言葉

「ひと言で言えば(要するに)どういうこと？」
「言い換えれば(つまり)どういうこと？」

○考えの具体化を促す言葉

「例えば、～はどういうこと？」
「具体的に言えば、どういうこと？」

○考えの比較を促す言葉

「一方、～についてどう考えるの？」
「他の～についてどう考えるの？」

○考えの深まり・広がりをもたせる言葉

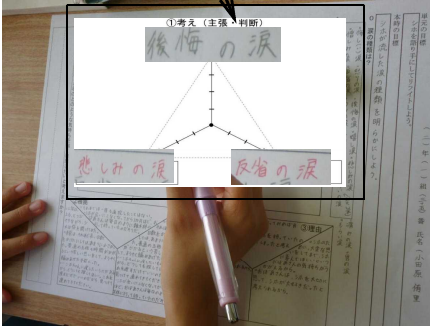
「この考えの根底には何があるの？」

具体的には、自他の考えを交流する場面で質問を通して自他の考えを広げたり、深めたりして共有化を図れば、自分がどのような「言葉による見方・考え方」を働かせているかが明確になるとともに、言葉に対する自覚が高まる。また、この思考を促す言葉を活用して互いに助言や質問を行うことにより、言語活動の過程で生徒が「言葉による見方・考え方」を働かせるようになるので「学びの深まり」を実感できるようになるのである。このような思考を促す言葉を活用することは、生徒間の交流場面はもちろんのこと、指導者が学習場面において助言や質問などにより生徒の思考を広げたり、深めたりする際にも有効な手立てとなる。

4 「言葉による見方・考え方」を働かせ、思考を促す言葉を活用した授業設計

生徒が課題を解決するために「言葉による見方・考え方」を働かせ、思考を促す言葉（語彙）を活用しながら互いの考えを交流し、「学びの深まり」を実感させた実践事例を紹介する。

- (1) 教材名 『小さな手袋』（三省堂 現代の国語Ⅱ）
- (2) 単元の目標（主たるもののみ記載）
 - ・ 物語について感想をもち、他者と交流して考えを深めようとしている。（国語への関心・意欲・態度）
 - ・ 登場人物の言動の意味を考え、内容の理解を深めることができるようにする。（読む能力）
 - ・ シホの心情が読み手に効果的に伝わるように結末部分をシホを語り手に描写などの表現を工夫してしてリライトすることができるようにする。（書く能力）
 - ・ 文章を読んで行為や心情などを表す多様な語句について理解を深めるとともに、文章の中の語彙について関心をもっている。（言葉についての知識・理解・技能）
- (3) 言語活動：「シホを語り手（視点）にして、物語の結末をリライトする」
- (4) 本時の実際（4／6）

過程	学 習 活 動	時間	指 導 上 の 留 意 点
つかむ・見通す	1 前時までの学習、本時の課題や学習の流れを確認する。 本時の目標 シホが流した涙の種類とその大きさを明らかにしよう。	5分	・ 本時は、前時までに形成した自分の考えを基にしてグループで考えを深め、「シホの涙の種類」を明らかにしていく学習であることを確認させる。 単元の言語活動 シホを語り手（視点）にして、物語の結末をリライトしよう。
課題を追究する	2 互いの考えを交流する。 課題解決に働く「言葉による見方・考え方」 ◎ シホの行動描写に着目し、シホの行動と涙の種類と大きさを比較したり、関連付けて人物の心情を捉える。 3 グループでまとめた意見を、思考を促す言葉と交流のポイントを使って意見交換する。 ※ 思考を促す言葉と交流のポイント ① なぜ、どうして（根拠や理由の関係付け） ② 一方で、だけど（考えの比較） 4 気付いたことを記述する。 5 スケーリング に基づき、変容し、深化した自分の考えを記入する。 	15分 言葉による見方考え方 15分 思考の過程 5分 5分 学びの深まり	・ 互いの考えを広げ、深められるようにするために、視点を明確にもたせた上で交流させる。 → 視点（見方） → シホの行動描写 ← 行動描写例 ○シホは、小さな手袋を両手に包み、顔を強く押しつけた。 ○かすかなおえつが漏れ出た。 ○涙でぬれた目が輝いた。 → 思考操作（考え方） → シホの心情 ← ○描写に着眼した心情の大きさの 比較 ○描写に着眼した心情の種類の 関係（関連）付け ・ スケーリングを用いて涙の種類と大きさを可視化して、互いの考えを比較させる。 ・ 共通点や相違点に着目して比較させる。 ・ 根拠や理由に基づいて互いの考えを発表させることで、思考の深まりにつなげさせる。 ・ 広がったり、深まったりした考えの変容の自覚を促すため、表現のポイントを参考にして記述させる。 ※ 表現のポイント ① なるほど ② やはり ・ 自分の考えの変容を明確にするために、色を変えて記述させる。  
振り返る	6 交流前後で深化した考えの変容を振り返りながら、本時の学習の成果も記述する。 次時の学習について確認する。	5分	・ 本時の学習を通して「何ができるようになったか」（変容）の観点で学習成果を記述させる。 ・ 次時の学習は、本時を踏まえ、シホを語り手（視点）に結末部分をリライトすることを伝える。

※ 薩摩川内市立川内北中学校 池田 貴裕 教諭の実践を基に作成

(5) 「言葉による見方・考え方」を働かせた言語活動を通して、生徒が結末部分をリライトした表現

【父の視点で描かれている教科書本文の結末】

シホは、小さな手袋を両手に包み、顔を強く押しつけた。かすかなおえつが漏れ出た。「それで、」と私が代わりに聞いた。「宮下さんは、今どうなさっていますか。」

「はい、お元気ですよ。まだ、この病院に入院していらつしやいます。」

シホが顔を上げた。涙でぬれた目が輝いた。

「会いたい。会ってもいいですか。」

シホは、すぐさま走りだそうという気配を見せた。それを修道女が静かに押しとどめた。「会ってもいいかもしれません。もうシホちゃんが誰なのか、わからないんですよ。この一年ほどで、急にぼけが激しくなりましてね。……しきりに大連のことばかり話しています。周りの人を、みんな大連に住んでいたときの近所の人だと思ひこんでね。ご本人は大連に……。」

「そう。宮下さんは、もう大連へ帰ってしまったんですよ。昔の大連にね。」

シホは、おばあちゃんの手袋を両手に包み、うつくしく顔を押しつけた。知らずに涙がこぼれ、おえつが漏れ出た。

おばあちゃんはずっと待っていてくれたのだ。目に浮かぶようだった、小さなおばあちゃんが雑木林の中で一人、不自由な手を一生懸命動かしている姿が。

「それで、」とお父さんは修道女さんの話を促した。私が話せないことが分かったのだろう。

「宮下さんは、今どうなさっていますか。」

私は、**斬るような気持ちで修道女さんを見上げた。**

「はい、お元気ですよ。まだ、この病院に入院していらつしやいます。」と彼女は答えた。私はその言葉を聞いて、はつと顔を上げた。**もしかしたらまた話せるかもしれない、そんな気持ちでいつばい**だった。

「会いたい。会ってもいいですか。」

半ば叫ぶようにして問いかける。私は返事を待たずに駆け出そうとしたが、ふるふると首を横に振った修道女さんに止められてしまった。

「会ってもいいかもしれません。もうシホちゃんが誰なのか、わからないんですよ。この一年ほどで、急にぼけが激しくなりましてね。……しきりに大連のことばかり話しています。周りの人を、みんな大連に住んでいたときの近所の人だと思ひこんでね。ご本人は大連に……。」

「大連に……。」

駆け出そうとした足から急に力が抜けていくのが分かった。昔、おばあちゃんがそんな話をしていたのを思い出す。おやつを食べながらどこかつかい目で語っていた様子が今になって鮮明に浮かんできた。

「そう。宮下さんは、もう大連へ帰ってしまったんですよ。昔の大連にね。」

その言葉に私は**後悔と切なさでいっぱいになった。もつと早く来ればよかった。ひどく胸が痛かった。**

もう一度手袋を両手で包む。一か月もかかったというにしてはともかく、今の私の手が入るかすら分からない。それでも**ずつと大切にしよう**と思った。**おばあちゃんのことを絶対に忘れないように。**

手袋を抱きしめていると、ふと修道女さんが窓の外を見た。つられて私も顔を上げると、そこには満開を過ぎてひらひらと散っている桜の花卉が舞っていた。

【シホの視点で生徒がリライトした結末】

私は、おばあちゃんの手袋を両手に包み、うつくしく顔を押しつけた。知らずに涙がこぼれ、おえつが漏れ出た。

おばあちゃんはずっと待っていてくれたのだ。目に浮かぶようだった、小さなおばあちゃんが雑木林の中で一人、不自由な手を一生懸命動かしている姿が。

「それで、」とお父さんは修道女さんの話を促した。私が話せないことが分かったのだろう。

「宮下さんは、今どうなさっていますか。」

私は、**斬るような気持ちで修道女さんを見上げた。**

「はい、お元気ですよ。まだ、この病院に入院していらつしやいます。」と彼女は答えた。私はその言葉を聞いて、はつと顔を上げた。**もしかしたらまた話せるかもしれない、そんな気持ちでいつばい**だった。

「会いたい。会ってもいいですか。」

半ば叫ぶようにして問いかける。私は返事を待たずに駆け出そうとしたが、ふるふると首を横に振った修道女さんに止められてしまった。

「会ってもいいかもしれません。もうシホちゃんが誰なのか、わからないんですよ。この一年ほどで、急にぼけが激しくなりましてね。……しきりに大連のことばかり話しています。周りの人を、みんな大連に住んでいたときの近所の人だと思ひこんでね。ご本人は大連に……。」

「大連に……。」

駆け出そうとした足から急に力が抜けていくのが分かった。昔、おばあちゃんがそんな話をしていたのを思い出す。おやつを食べながらどこかつかい目で語っていた様子が今になって鮮明に浮かんできた。

「そう。宮下さんは、もう大連へ帰ってしまったんですよ。昔の大連にね。」

その言葉に私は**後悔と切なさでいっぱいになった。もつと早く来ればよかった。ひどく胸が痛かった。**

もう一度手袋を両手で包む。一か月もかかったというにしてはともかく、今の私の手が入るかすら分からない。それでも**ずつと大切にしよう**と思った。**おばあちゃんのことを絶対に忘れないように。**

手袋を抱きしめていると、ふと修道女さんが窓の外を見た。つられて私も顔を上げると、そこには満開を過ぎてひらひらと散っている桜の花卉が舞っていた。

5 「学びの深まり」を実感する「振り返り」の場面の設定

生徒が「言葉による見方・考え方」を働かせ、言語活動を行っても、言語活動を通して生徒が身に付けた言語能力（学習内容や指導事項）の観点からの確な振り返りがなければ、生徒自身に「学びの深まり」を実感させ、学習内容や指導事項としての言語能力の定着を図ることはできない。言い換えれば、「言葉による見方・考え方」を働かせ、実現した言語活動を生徒自身が振り返りながら、学んだことを自覚する場を設定することによって言語能力（学習内容や指導事項）の確実な定着を図ることができるのである。振り返り際には、単に言語活動の取組に対する態度的な側面だけではなく、生徒が学習する単元の目標や本時のねらいに応じて、例えば、次の表2の観点进行参考にして振り返りを充実させることで、生徒は「学びの深まり」を学習の成果として実感できるようになると考えている。

表2の①は学習内容の定着、②は学習の成果

表2 単元末や授業の終末時の「振り返り」の観点例

観点	振り返りの観点の内容
①	学習を通して何が分かったか。
②	学習を通して何ができるようになったか
③	学習の成果をどんなことに生かせるか。

と変容、③は学習内容を他の場面で活用・適用する観点として示している。各観点を参考にして学習活動や「学びの深まり」に応じて振り返りのステップアップを図りたい。また、生徒による振り返りの場面の設定とともに、生徒が身に付けた言語能力を指導者が的確に把握し、到達度を評価することは生徒一人一人に「学びの深まり」を実感させるために欠かせないことである。

「言葉による見方・考え方」を働かせ、言語活動を通して生徒が「学びの深まり」を実感する国語科の授業改善が進むことを期待している。

ー引用・参考文献ー

- 文部科学省『中学校学習指導要領解説国語編』平成29年
- 鹿児島県総合教育センター『指導資料1937号(国語第141号)』平成30年4月
- 鹿児島県総合教育センター『指導資料1961号(国語第144号)』平成30年10月

(教科教育研修課 小野 修)